

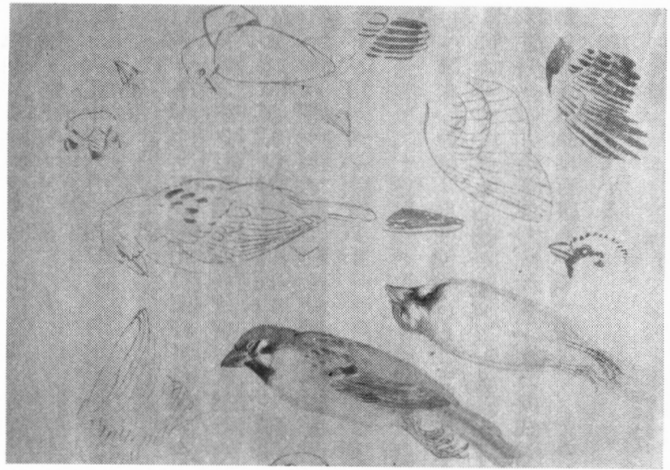
⑬ 美校時代、晨光会のことなど 日下八光

〔本稿は平成四年五月十八日、日下八光先生（大正十三年日本画科卒）のお宅で回顧談を伺った際の録音を編者がまとめたものである。〕

美校時代

昔の画学生のアルバイトには田舎回りして応需揮毫というのがあって、徳島の私の家にも鈴木宇響という、小室翠雲の弟子で南画を描く人がやって来た。私は美校へ入りたいと思っていたので、この人にいろいろ尋ねると、自分は日暮里の青雲寺〔小坂象堂の墓がある。――編者註〕に下宿しているが、同宿に常岡文亀という美校生が居ると言う。そこで早速紹介して貰い、上京して常岡に会い、すすめられて川端画学校に入り、それから美校の試験を受けた。入学すると入試の成績順に机が並んでおり、久本春雄が一番、私が二番だった。尤もこれは一学期だけは仮入学で、九月から一年生になることになっていた。なお、鈴木宇響さんのちに郷里会津の熱塩温泉の旅館の主人におさまり、戦後、私が東北スケッチ旅行の折りに尋ねたときは旅館組合長として活躍していた。

当時の日本画科には小堀鞆音、川合玉堂、結城素明、松岡映丘、小泉勝爾、篠田柏邦といった先生がいて、出校の曜日が決まっていた。先生方は教室を廻り質問があれば答えるといった調子であったが、老大家の小堀先生には殆んど誰も質問する者もなく、また、川合先生も偉い画家には違いないが私は古くさいといつてあまり質問などしなかった。先生は誰かが量感を出すために胡粉を盛り上げたりしていると、やって来てそれを見て梓張した絵絹を指でタンタ



雀写生

ンと叩く。それがまるで太鼓のように鳴るのをみてニヤニヤと笑っておられた。私は先生の教え方で一つ印象に残っていることがある。それは二年か三年の動物写生の授業で、教室には数羽の雀を入れた鳥籠が三つばかり置かれ、各自死んだ雀を一羽ずつ与えられて写生していた。私が

死んだ雀を静物みたいに描いていると、先生が来て「色の感じはよく出ている。しかし、これじゃ研究になりません。」と言う。そして、鳥というのは空を飛ぶから胴体は箱のようになっていて動くのは首と尻尾の部分だけである、そうでないと空を飛べない。翼は風切羽が一番先きにあつて、それが一番固く、二、三番目が一番長い。嘴は上唇だけが頭骸骨に付いているので動かさず下唇はペラペラと皮膚の力で開くようになっていて、目は上唇の上にある。と、羽根を広げたところや畳んだところ、あるいは目の位置などを私の絵

の余白に立ったまま描きながら説明された(挿図)。皆が私を取り囲んでそれを聴いたのだが、さすがに解剖学をふまえて写生を深く研究しておられただけに、その説明にはなるほどと思った。

当時は権威ある展覧会は文展、院展しかなく個展などない時代だったから審査員はまさに生殺与奪の権を持っていたと言える。我々から見れば掛離れた存在であった。授業のときは、結城先生はそういうことは無かったが、松岡先生は自分の気に入った生徒のところへだけ行くといった調子であった。しかし、凡ゆる絵巻の評価ということを初めてしたことからもわかるとおり大変博学な人で、話が実に面白かった。

コンクール

コンクールというのは学期末競技のことで、生徒は好きな題材を選び、三、四週間の期限内で大作を描いた。先生方がそれを厳重に審査し、甲から丁までの順番を付ける。このときは生徒は教室を閉め出され、山田廉という、科の事務的なことを担当していた先輩が作品を並べ換えたりしていた。

コンクールには卒業生たちが大変注目していた。発表の当日には多くの参観者があった。それは当時の日本画研究の最先端であり、大きな刺激になったからである。そこで何回も優秀な作品を発表する生徒は生徒仲間や卒業生に自然と名前を覚えらるのであった。

晨光会と新興大和絵会

当時の官展の審査委員ともなると、今日では想像もできぬ位威張っていた。西の栖鳳、東の寺崎と言われた、かの寺崎広業先生は、私が入学した前年に死去されたが、噂によると宏壮な邸宅を構え、

多くの弟子を擁し、研究会のときなど先生の居るあたりには霞がかかっていたという程である。官展で活躍した薦谷龍岬と矢沢弦月は広業門下の双壁と言われ、大変張合っていたが、ある年、帝展が近づき、六曲一雙など自宅で描けないので、結城先生に頼んで学校の空き部屋を使わせて貰うことになった。そのとき、弦月はたった一人で描いていたが、龍岬の方は横で三人の弟子が絵の具を溶いたりしており、部屋の隅には下谷の芸者がお茶や菓子の用意をして控えているといった風で、実に華やかなものであった。

結城、松岡両先生の威勢も大したものであったが、両先生の場合、創意工夫による新鮮な作風が人気の源であった。日本画科の生徒は大体卒業の頃からどの先生に就くかを決めたが、自ずと結城派、松岡派に分かれた。

晨光会は結城派の卒業生が結成した団体で、私は卒業の年(大正十三年)に先輩に誘われて入った。月一回の研究会があり、結城先生は帝展の二、三ヶ月前になって我々が小下図を持ち寄ったときとか、さらに大きい下図を持ち寄ったときとかに來られた。会の飲み会にはよく來られて、全部支払って下さった。歌人の半田良平(明治二十年〜昭和二十年。大正八年に歌集『野づかさ』で写真に立脚した歌風を確立した。大正期に『報知新聞』に美術批評も執筆した。——編者註)は会合に必ず出席して文学的な面白い話をした。結城先生と親しく、歌集『野づかさ』の口絵は結城先生が描いている。我々と一緒によく旅行もした。

官展にも時代に応じて画題の推移というものがあり、当時は特選になるのは人物画は現代人物より歴史人物、花鳥画等が多く風景は

少ないといった具合であった。我々はまだ「山水」と呼ばれていたような概念的な風景画には飽き足らず、全てを打破して新しいものを作る意気込みで勉強した。よく文庫（後に図書館と資料館に分かれる）で西洋の画集などを見て勉強したが、画集など少なく、貴重であったので一番見たい本は誰かが借り出しているのが常だった。

会員のうち、小泉勝爾は最古参で美校の教官でもあったから、皆世話になった。矢沢弦月は東京女高師の教師で如才のない人だった。官展で一度だけ特選を取ったが、晩年は振わなかった。篠田柏邦は岐阜の多額納税者の息子で、大人しい絵を描いた。彼の「小原女」が官展の特選候補に昇ったとき、寺崎広業が、この男はいつでも特選になれるのだからと言って断ってしまったという話がある。

畠山錦成は人物画では抜群で、色彩的にあれ程うまく描ける人は居なかった。その皮膚の色、髪、濡れたような唇など、当時の日本画の技法ではとても表せないもので、まさに天才だと思ったが、しかし、上述のように帝展へ現代人物画を出すと落ちる。特選となったのは二点とも花鳥画であった。常岡文龜は丹波柏原の大地主の息子で、帝展で二回特選を取り、一時期大変もてはやされた。花鳥画を得意としたが、鶏頭や棕櫚の絵を見ればわかるように官展風の花鳥画と違って実に新鮮な作風であった。美校のコンクールに朴の木にカケスの居る絵を描いたが、金泥をふんだんに使い、緑青を見事に使って初夏の林間の感じをよく表していた。ただ、この人はある意味での戦争犠牲者で晩年は不遇であった。星川清雄は山形の人で、新しい美人画を描いて一時期非常に囑望された（入院中に関東大震災で病院が倒壊し、そのため死去した。――編者註）。久本春雄は春風駘蕩

としたところのある気のきいた絵を描いた。彼は釧路の遊郭の息子で、銘仙の纏袍（どてら）を着て友染の坐蒲団に坐り、遊女から来た手紙など読んで聞かせたものだ。根上富治は細密描写のすごい腕を持っており、美校在校中に鷹の絵で特選を取り、一時期大繁盛した。笑い話のようだが、名前の根上（ねあがり、値上がり富んで治まる）が書画屋に喜ばれたそうである。

革新を目ざして暗中摸索していた晨光会に対して、松岡門下の新興大和絵会の方は伝統を踏まえて新しいものを描こうという主義で、洗練された大和絵の伝統技法を土台としてその上に工夫を加えてゆくものだから、絵がちゃんと出来ており、官展でも良い成績を上げた。また、松岡先生は弟子を指導・バックアップすることに大変熱心だった。その点結城先生は面倒臭いのか、のん気であった。ライバルだった松岡先生が若死してから、心なしか結城先生も意欲的な活動をされなくなったようである。

晨光会は大正十五年に解散したが、その後旧晨光会員を軸に五十名ほど集まって新樹会を結成したが、もうその頃は戦争が始まって居り展覧会もたしか一回しただけで立ち消えとなってしまった。戦争、疎開で友人達も散り散りになってしまい、終戦となっても連絡のとれる人は数少なくなっていた。

⑭ 大村西崖と中国

大村西崖は明治三十五年以来東洋美術史担当教授をつとめ、その間には『支那美術史彫塑篇』をはじめとして幾多の中国美術に関する著述をなしたが、彼が実際に中国の土を踏んだのは大正十年秋の